

新年を迎え、改めて令和元年という年を振り返ってみると、様々な自然災害に見舞われた年でありました。とくに9月に発生した台風15号や、10月に発生した台風19号は、日本各地で河川の氾濫等の水害をもたらしました。被災された方々の一日も早い復興を、心よりお祈り申し上げます。

そして、岩手県を代表する河川である北上川流域においても、古くから台風をはじめとする自然災害により、数多くの水害に見舞われてきました。北上川流域で発生した水害は江戸時代以降のおおよそ400年間に300回以上との記録が残っています。一例として1910年（明治43年）には、連続的に発生した台風や集中豪雨による大洪水のため、盛岡市内はほぼ全域が浸水し、11の橋梁が流失しました。また1947年（昭和22年）に発生したカスリン台風では、堤防の決壊等により流域一帯で死者・行方不明者合わせて200名以上の被害が発生。更にその翌年に発生したアイオン台風は、死者・行方不明者合わせて700名を超える大被害をもたらしています。このように時として北上川は人々の生活や生命を奪う大災害の原因となっています。

しかしながら、北上川は古くから人々に豊かな恵みを与えてきた存在でもあります。交通路として、江戸廻米をはじめとする舟運や、かんがい用水の供給、漁業、水力発電と過去から現在にかけて、様々な形で人々に自然の豊かさを分け与えています。

また、水死者の霊を弔うために始めたとされる舟っこ流しや、夕顔瀬橋に伝わる馬を川へ引きずり込んだといわれる河童伝説、岩手県内各地に伝わる大洪水の際に白髭の老人が現れたとされる白髭水伝説など、北上川にまつわる文化が今も数多く息づいて

いることは、人々が昔から密接に北上川と繋がっていたことの表れではないでしょうか。

北上川は、時として人々に大きな災いをもたらしてきましたが、それ以上に豊かな恵みを分け与え、北上川流域沿いに独自の文化を醸成してきました。

そういった中で当時の技術者達は、様々な問題に直面しながら北上川と人々がより良い関係を構築できるよう尽力してきました。古くは江戸の時代に遡り、水害の被害低減と交通網整備を両立させるべく、複数の小船の上に人馬往来が可能な敷板を並べた、新山舟橋を現在の明治橋付近に架設。また、昭和の時代には洪水対策、発電、かんがい用水等の供給を目的とした「北上特定地域総合開発計画」による北上川流域への多目的ダム群の建設等を行ってきたのです。

これからの日本社会は少子高齢化、人口減少、労働力の確保といった問題が山積しています。そしてワークライフバランスや働き方改革も進めていかなくてはなりません。我々の住む岩手県も同様です。そういった中で我々技術士は、経済や科学技術の持続的発展や、世界的な環境保全と経済成長の両立といった課題の解決に努めることが責務です。これらの問題や課題は、北上川と共生する将来を考えていくうえで決して無関係ではありません。

北上川は幾多の時代を経て、その時々表情を川面に映しながら、昔と変わらず悠々と流れ続けています。私はその流れに寄り添いながら、時には対峙しながら、先人達がそうしてきたように様々な問題や課題に取り組みつつ、北上川と人々のより良い関係の構築の一助を担っていきたいと考えます。